

夏の本棚

ゆかわ まこ



夏の本棚

終わりがけの夏休み

押し入れの発見

和彦おじさん

海の近くの家

おじさんのカレー

虫干し作業

絵本との出会い

原田先生との思い出

おじさんのいない日

本当のこと

最後の夜

遠い夢

おみやげ

夏が終わる

終わりがけの夏休み

「あーあ、もうすぐ夏休みも終わるかあ」

悠太は残りわずかとなった、小学校生活最後の夏休みを惜しんでいた。

居間のフローリングは少しひんやりしていて、ベタつくけれど、ティーシャツ一枚で寝ころんでいるとちょっとは暑さがまぎらわせる。窓をあけて、扇風機をまわしている。

今年はたまたまお父さんの仕事が忙しくて、家族旅行にも行けなかった。悠太にとってみれば、なんとなく消化不良の夏休みなのだった。

「宿題は全部終わったの？」

ちょうど洗濯物が洗い終わったところらしい。お母さんが、カゴに入れた洗濯物を運んでいる。床にごろごろしている悠太がいかにも邪魔という顔つきだ。

「あー、そういえば読書感想文終わってないやー」

うつぶせから仰向けに、寝がえりをうちながら答える。

「宿題も終わってないのに、夏休みも終わるかあ、なんて言ってたわけ？全くあきれられるわね」

悠太は本を読む習慣がないので、毎年夏休みの読書感想文には苦勞していた。本を選ぶ、本を読む、感想文を書く、という三段階の面倒くささは、なかなかのものだ。

「ねえお母さん、かわりに書いてよ、洗濯手伝うからさー」

「何言ってるの。だめに決まってるじゃないの」

お母さんはこちらをちらりとも見ずに、ベランダに出て行く。洗濯物を干すのだ。

「やっぱりだめかあ」

悠太は天井を見つめて、ゆっくりと回っている扇風機の首がこちらを向くのを待った。扇風機の風はびゅう、と突風のようにやってきて、でもまたすぐに行ってしまう。

洗濯物を干し終えたお母さんが、空のカゴを抱えたまま立ち止まった。

「あ、悠太、和彦おじさんのところでも、行ってみる？」

お母さんが、床に仰向けになったままの悠太を見下ろしていた。

「和彦おじさん？」

和彦おじさんは、お母さんの弟だ。悠太はほとんど会ったことがない。

洗濯物を干し終わったらまた宿題のことを言われると身構えていたので、突然おじさんの話が出てちょっと驚いた。

「おじさんのところに行くってどういうこと？」

「和彦おじさんはね、夏の間は東京の家を離れて、一人で海の近くにある別荘で過ごすことが多いのよ。もう夏も終わりだから、そろそろ東京に戻るころだと思うけど、聡介くんとでも一緒に行って泊めてもらったらいいじゃない。今年は旅行にも連れてってあげられなかったし。小学校最後の夏休みなのにちょっとはかわいそうだったなって思ってるのよ」

和彦おじさんは、東京で大学の先生をしている。研究者、なのだ。何の研究をしているのか悠太はよく知らないけれど、夏の間は家族と離れて一人で海の近くの町にある家にこもって、研究や書き物をしているのだそう。

聡介というのは悠太の親友。学校の休み時間も、放課後も、いつもサッカーをして遊ぶ仲だ。その聡介と二人でおじさんちに泊まる、というのはなかなか魅力的な話だと悠太は思った。だけど、読書感想文の宿題が終わっていないという話をしていたにも関わらず、遊びに行く提案をしてくるなんて、お母さん、ど

うしたんだろう、と悠太は思っていた。洗濯物を干している間に忘れてしまったのかな。

「和彦のところで読書感想文、終わらせてくればいいじゃない」

「どういうこと？」

「和彦、子どもの読むような本やら絵本やら、たくさん集めてるのよ。確か夏に過ごす家の方に、本を全部運んだって言ってた気がしたわ。小さな図書館みたいなもんよ。そこで本読んで、ちゃちゃっと書いてきちゃいなさいよ」

「ちゃちゃっと、って、ねえ……」

「いいから。行くの行かないの？夏休みも残りわずかなんだし、行くんなら和彦に連絡してあげるから。まずは聡介くんに聞いてみなさいよ」

悠太は早速、聡介の家に電話をした。いつもの通り聡介のお母さんが電話に出て、悠太が「もしもし、あの」

まで言ったところで、

「はいはい、今、わかるわね」

と、声だけで悠太だとわかって、すぐに聡介にかわってくれた。

「もしもし悠太？」

聡介はあくび混じりの声だ。悠太は、さてはこいつも怠けてるな、と思った。

「なあ、読書感想文って書いた？」

悠太はまずそこから聞いてみる。

「書いた書いた！そんなのとっくに書いた、わけないだろー。あはは」

聡介がだらしない声で笑う。

「あのさ、和彦おじさんて人がいるんだけどさ」

「は？」

聡介は、寝ぼけた状態の上に、読書感想文、和彦おじさん、という言葉がぼんぼんと出されて、わけがわからなくなっているようだ。

「だから、その、ぼくの親戚のおじさんちに、二人で泊まりに行かないか？」

悠太は事情を説明した。聡介は残りの夏休みに特に予定もないし、絶対行きたい、と、突然目が覚めた声になった。

聡介がその場で聡介のお母さんにそのことを話すと、聡介が、

「母さんが、悠太のお母さんにかわれって」

と言って、お母さんどうしの話となった。

どうやら、

「いいんですか？お邪魔してしまって……」

というような、大人どうしの会話をしているらしい。社交辞令、というやつだ。

そんなわけで、小学生生活最後の夏休みの、最後の最後に、なかなか魅力的なイベントが舞いこんできた。

悠太のお母さんが和彦おじさんに電話をすると、話は早かった。

「あさってはどうかって、言ってたよ。ちょうどいいから手伝ってほしいことがあるって。掃除か何かかしらねえ」

お母さんは淡々とやっているけど…

「掃除ー？」

夏休み最後に舞いこんだせっかくのイベントに「感想文の宿題」「掃除の手伝い」という憂うつなキーワードが並んでしまった。

それでも、仲のいい聡介と二人で泊まりに行くというのは、十分に楽しみだ。

押し入れの発見

悠太はさっそく準備を始めた。

おじさんの家に泊まるのは、三泊四日の予定となった。それなりの準備が必要だ。

五年生のとき林間学校のために買ってもらった大きなスポーツバッグを押し入れから出す。

今年の秋には修学旅行があるが、その前にまたこれを使うチャンスがあるのはうれしかった。

押し入れを開けてごそごそやっていると、お目当てのスポーツバッグの奥に段ボール箱が見えた。「悠太・ようちえん」と、黒のマジックで書かれている。いつもならそんなの気にもとめないのだが、うきうきした気分の悠太は、なんとなくその箱に手をのばした。

箱を出して中を見てみると、悠太が幼稚園のころに書いた絵や、思い出の品がぎっしりつまっている。

その中に、箱の側面にそって入れられた分厚い本のような物があった。

「ん？あ、アルバムかあ」

このアルバムは、卒園するときに卒園生全員がもらったおそろいの卒園アルバムだが、表紙の絵が一人一人違っている。というのも、画用紙で貼り絵をして、それぞれが自分のアルバムの表紙を作るという工作の時間があったのだ。

悠太はどんぐり拾いの遠足のときのことを貼り絵にした。頭でっかちで手足が細く短い、そんな人間が三人と、巨大などんぐり三つの絵が、色とりどりの画用紙で作られている。この三人の中のどれかが自分自身のつもりだったはずだが、どれだか忘れてしまっていた。

「ひゃあ、懐かしいな」

小学校に入学してからは、このアルバムを見ることはなかったから、ある意味、タイムカプセルのようだ。

四年生のときに、十歳の「半分成人式」が学校であって、校庭にタイムカプセルを埋めた。十年後の成人式で開ける約束だ。そのときは、今よりずっとずっと、懐かしい気持ちになるのだろうと思う。自分はそのとき何をしているんだろう、ちゃんとタイムカプセルのこと思い出すのだろうか、と悠太は思った。

とりあえず床に寝ころんでアルバムを見ようと、手に取る。とても分厚く硬い表紙だ。

ページごとに配置を考えてしっかり貼られている写真以外にも、整理されずに適当にはさまれているだけの写真が何枚かある。

遠足やおゆうぎ会の際の、大きく引きのばされた集合写真や、お父さんやお母さんが撮った写真もあるみたいだ。悠太はぱらぱら見ながら、

「ああ、こいつなあ、ええっと。ともくん。あれ、苗字はなんだっけ」

なんてぶつぶつ言いながら、心の奥の方に閉じ込められかけていた記憶をつんつんとつついている。

部屋の大掃除をしているときに、「ああ、これここにあったのか」なんて言ってついつい見てしまい、掃除が進まなくなることがあるが、まさにそのようなかんじだった。

すると、

「はあっ！」

アルバムにはさまっていた一枚の写真を見て、思わず叫び声とため息の中間みたいな音になってしまった。

なんだなんだ？なんだっけ？

思い出せそうで思い出せない。

その写真は、とても「美しい」写真だった。

集合写真だけれど、遠足などのときと違って、プロの人が撮って大きく引き伸ばしたというような物で

はない。いつもの毎日、普通の日に撮ることになった、集合写真。

悠太の、ぞうぐみの全員と、担任の原田先生が写っている。

先生はいつもの笑顔、子どもたちは、くしゃくしゃの笑顔だったり、真顔でちょっとにらむような目つきになっていたり、目をつぶってしまっていたりした。

悠太は自分をすぐに見つけることができた。ちょっとうつむいて、上目遣いでカメラを見ている。大泣きした直後だったのだ。悠太はそのことだけは覚えていた。

そしてこの写真の「美しい」というのは、子どもたちの足元にある。

牛乳びんだ。

小学校の給食の牛乳は紙パックにストローをさして飲むけれど、幼稚園のときは、給食でびんの牛乳を飲んでた。

毎日牛乳屋さんが大きな黄色いラックに入れて、カタカタさせながら運んでくれる。びんはとても分厚いガラスでできていて、飲み終わったびんはまたラックに戻しておくのと牛乳屋さんが回収に来る。再利用するのだ。

牛乳を飲むときには、びんの丸い口にぴったりとはめられた厚紙のフタに専用の針を刺して、フタをはずす。針を使うときにちょっとドキドキして、危険な針を使える大人になったような気分だったことを思い出す。

そう、その牛乳びんが、この写真には写っていた。

二十本くらいの牛乳びんが横一列にずらりと並んでいる。

そして……びんの中には、一本一本違う色の液体が入れられているのだ。ピンク、黄色、緑色、水色。それがきれいに並べられている様子には、「アート」という言葉が合いそうだ。

だけど悠太の頭の中は、「アート」を堪能している場合なんかではない。何かを思い出そうと必死になっていた。

カラフルな牛乳びんの中に混じって置かれたうす茶色のびんが、妙に気になった。

和彦おじさん

夏休みも最後の週となった。

悠太と聡介は近くの駅で待ち合わせをした。朝九時。

二人とも毎朝お母さんにたたき起こされて夏休みのラジオ体操だけは続けている。今朝も小学校の校庭で一緒にラジオ体操をして、いったん帰って朝食をとってからの待ち合わせだった。

和彦おじさんの「海の近くの家」へは、鈍行の電車で一時間半くらいだ。一度乗り換えがある。

乗り慣れているいつもの電車から乗り換えると、車窓には次第に緑が増え、やがて海が見えた。

線路と並行している道路に車が走っているのが見え、その向こうに海が広がっている。太陽の光で波がきらきらしている海面は、まるでパンコールの衣装のようだ。

もう夏休みも終わりで、出かける人もあまりいないのか、電車はとてもすいている。

静まり返った車内。駅に停車するたびにドアが開いて、セミの声が勢いよく聞こえる。発車ベルが鳴り、ドアが閉まるとセミの声はまた遠くなった。

耳慣れない駅名を見ながら何度かそんなセミの声を聞くと、目的の駅に到着した。

電車の中は冷房がきいていたので、降りたとたん、むわっと暑い空気が顔にまとわりついて、海の香りと、セミの声がした。音もおいも、全てが夏だ。おじさんが駅まで迎えに来てくれていた。駅には他に人影もなかったのですぐにわかったのだ。

おじさんは、三角のえりがついた真っ白な半袖のシャツのすそを、ジーパンに入れている。

「こんにちは、加山悠太です」

「こんにちは、佐々木聡介です」

悠太と聡介は少し緊張しながら自己紹介をした。聡介は初対面だし、悠太もとても小さい頃に会ったきりなので、ほぼ初めて会うと言ってもいい。

二人は夏休みもそろそろ終わりというこの時期になって、改めて夏を思い出した気がして、これから始まる四日間に、わくわくを抑えきれない。

おじさんとの初めのあいさつ。おじさんがどんなことを言うのだろうか、二人は上目遣いでおじさんを見た。

「よく来たな」

おじさんは、ほっぺたをふくらませてからそう言って、言い終わったあとにまたほっぺたをふくらませた。癖なのだろうか。または、ちょっと照れているようにも見えた。

「お世話になります」

二人がお母さんから教わったあいさつに声をそろえ、ぺこっとおじぎをすませると、

「じゃ、まあ、行くか」

と言っておじさんは歩き始めた。

古い旅館のトイレに置いてあるようなサンダルを少し引きずりながら、乾いた音を立てて歩くおじさんのあとを、二人は並んでついて行く。

長い二車線の車道が続く道に沿って、三人は歩いた。たまに通る自動車は、太陽をキラキラ反射させながら走っている。背の高い建物は一つもなく、小さな商店が並んでいた。足元のアスファルトが熱くなっていることが、見た目で見える。

「二人は、本を読みに来たのか？」

おじさんは、後ろを振り向かずに聞く。

「はい、あと、その、部屋のそうじを手伝うって、母から聞きましたけど」

悠太が答える。

「あはは、まあ、そうだな、部屋のそうじというか、シミタイサク、だな」

「シミタイサク??」

悠太と聡介は顔を見合わせる。

「おじさんの家には、たくさんの本がある部屋があつてな、ちょっと、ムシボシを、やってほしいんだ」

「ムシボシ??」

聞きなれない言葉が並ぶ。「ムシボシ」とは、なんだか料理の方法みたいにも聞こえるが、本の部屋とは結びつかない。

「シミタイサク、ムシボシ、って、なんなんですか？」

二人を代表して悠太が質問をする。

聡介は、友達どうしでいるときにはなかなか鋭いツッコミを入れたりするくせに、少し人見知りなところがあって、こんなときあまり積極的に質問をしたりはしないのだ。いつも聡介と一緒にいる悠太は、無意識のうちに、しゃべる係になる。

特に今回は悠太の親戚のおじさんだから、なおさらだ。

「シミ、というのは、紙の魚だ」

おじさんが、今度は後ろをついて歩く二人を振り返り、ちょっといたずらっぽい目でそう言った。

「紙の魚?おりがみですか？」

「ははは、なるほどな。いや、漢字では紙の魚と書いて、シミ、と読むんだよ。そういう虫がいるんだ。どこの家にもいる。畳なんかにすみついてしまったりするんだよ。紙を食べる虫なんで、本の敵なんだ」

「へえー」

どこの家にもいる、と言われて、悠太も聡介もゴキブリやくモくらいしか想像できなかった。

「虫干しってというのは、本に風を通す作業のことなんだよ。本棚に入れっぱなしになっている本はどうしても虫に食われやすくなってしまったり、かびが生えやすくなる。ずっと読まない本もたまには棚から出して、風を通してやるんだ」

なんとなくイメージができた。本棚から本を出して、風を通すという、普段の掃除とは違った大掃除をするのだ。

聡介も、小さい声で

「ふーん」

なんて言いながら小さく二、三回うなずいて、悠太と目を合わせる。

学校でも、夏休みの前や学年の終わりには教室の大掃除をする。

みんな「掃除は嫌い」というのが暗黙の了解だし、掃除をするとなるとブーイングが出るのがお決まりだけれど、なんだかんだ言って、大掃除という、普段と一味違った掃除は、毎日の掃除よりちょっと楽しい部分があった。机を全部廊下に出し床をびかびかに磨いてワックスをかけたり、まあ、面倒ということに違いはないのだけれど、普段と違うというだけで、なんとなく高揚感があった。学校の大掃除の場合、次の日から長い休みになるということも大きな要因なのだけれど。

悠太と聡介は、本に風を通すという未知の「大掃除」に、そんな学校の大掃除と同じ印象をもった。夏は、何もかも、掃除さえもわくわくに変えてしまう。

海の近くの家

おじさんの家はとても古そうで、周りの家も同じような家が多かった。おじさんにとっては夏の間だけを過ごす、いわば別荘なのだが、「別荘」という言葉からイメージされる家とはちょっと違っていた。

壊れかけた門をに入って、草ぼうぼうの庭を進むと玄関がある。

庭には手作りの花だんもあるようで、ひまわり、朝顔、それと数えきれない種類の雑草が巨大な花束のように庭を飾っていた。理科の授業で、「雑草という名の草はない。みんなそれぞれ名前があるんだぞ」なんて、習ったことをふと思い出す。

家にあがると、おじさんはまず冷たい麦茶を出してくれた。白い氷が三つ浮かんでいる。

悠太と聡介は、食卓のいすに並んで座らされ、向かいにおじさんが座った。

夏の間過ごすだけの家ということもあって物が少ないせいも、部屋の隅にりんごやお菓子のダンボールが何個か積み上げられているほかは、家の中はとてもすっきりしていた。

おじさんがこれからの予定を発表した。

「えー、まず、今日は、まあ、ゆっくりしなさい。本を読むもよし、昼寝するもよし、だ。あ、例の、本の部屋はあとで紹介するでしょう。そして明日はちょうど、天気もよさそうだし、虫干しを行う。やり方はしっかり説明するので、二人で全部やってもらう。そしてあさって。あさっては、わたしは本の仕入れに出かける。朝から留守にするので、二人でなんとかやってくれ。で、しあさっては、君たち、帰る日だな」

林間学校のときの校長先生みたいだった。

悠太と聡介はいくつか聞きたいことがあった。なんとなくそんな雰囲気だったので、悠太が挙手をする。「明日、虫干しということをするのはわかりました。あさっての、二人でなんとかやってくれ、っていうのはどういう意味ですか？」

「本を買いに、街に出るんだよ。仕入れ、といっても、まあ、気に入った本を探して買ってくるというだけだけどな。悪いが、食事の用意なんかも、二人でなんとかしてくれ」

電車を降りておじさんに会ってから無口になっていた聡介も、少しずつ調子を取り戻してきたようで、手を挙げた。

「それで、虫干しってどうやるんですか」

「それはあとでしっかり説明するって、言っただろ」

こんなとき聡介はいつもの的外れなことを言ってしまう。憎めないやつなのだ。少ししょげている。

「それより、食事の用意も二人でするって、ぼくたち、やったことないですけど」

悠太が話を元に戻す。聡介のさっきの質問がますます間の悪いものになり、ごめん、と思う。

「材料はなんかしら、置いておくから。なんとかなるだろ。俺たち動物は、生きるために、物を食べる。食べるために、知恵を使う。工夫をする」

なんだか突然、原始時代みたいな話になってしまった。

例の「本の部屋」は、二階にあった。木の階段をみしみしいわせながら薄暗い中を上がっていく。

案内されてのぞくと、思っていた以上に広い部屋だった。まさに学校の図書室のようなかんじだ。

壁はぐるりと本棚になっていて、部屋の中央にも低い棚があり、本がぎっしり入っている。そして、棚に入りきらない本がところどころに積まれていた。

大掃除をする、というような話を聞いていたので、ほこりだらけの部屋を想像していたけれど、意外にも清潔感があった。それに明るい。

窓が大きくて太陽の光がよく入ってくる。ちょうど窓の高さに桜の木の濃い緑色が風に揺れて、ちらち

らと光を反射している。春にはこの部屋でお花見ができそうだ。

おじさんがその窓を開けると、むっとしていた暑い空気が一気に流れ出し、生ぬるい、夏のおいの風が部屋の中を駆け巡る。電車のドアが駅で開いたときと同じく、せみの声が勢いよく部屋に入りこむ。

なんて気持ちのいい部屋なんだろう。

悠太も聡介も、すぐにこの部屋が気に入った。

本の部屋のとなりに小さな畳の部屋があり、二人はここで寝るようと言われた。部屋のすみに、布団が二組たたんで置かれている。

夕飯まで好きにしていなさい、と言い残しておじさんが階下に去ってしまうと、二人は本の部屋に寝ころんだ。ほとんど黒と言ってもいいような、深いこげ茶色の木の床は、ほてった体にひんやりと心地よい。「あー、うちのフローリングよりずっと気持ちいいや」

悠太は家でもそうしているように、うつぶせになってティーシャツの体とほほを床に密着させた。

「最高の昼寝ができるな」

聡介も仰向けになる。目を閉じると、せみの声が体中に降ってくるような感覚になった。

絵にかいたような、夏だ。

おじさんのカレー

「カレー、食うか」

おじさんの声で、悠太と聡介は目を覚ました。

すっかり眠ってしまっていたようだ。

おじさんが夕飯のしたくをしていていた。

おじさんの作ってくれたカレーは野菜がごろごろと大きく、甘口だ。ブロッコリーが入っているのがちょっと変わっていたけれど、とてもおいしかった。

おかわりするとき気づいたのだが、ごはんが鍋に入っている。どうやらこの家には炊飯器がないらしい。

悠太と聡介は、この家に到着したときと同じように、並んでいすに座り、おじさんが向かいに座っている。

この家にはテレビがないので、いつもテレビをつけて食事をしている悠太と聡介には、とても静かな食卓に感じられた。スプーンと皿がぶつかる音なんかが妙に意識される。

「二人はどんな本が好きなんだ」

おじさんが口をもぐもぐさせたまま聞いてきた。悠太も聡介も困ってしまった。本なんて読む習慣がない。

二人とも、学校の休み時間にはまっさきにサッカーボールを持って校庭に出る。休み時間教室で読書をするクラスメイトが理解できない、という二人なのだ。

「あの、実は普段あまり本を読む機会がなくて。でも夏休みは時間があるから読書のチャンスだし、その……」

悠太は正直に、でも気をきかせて答えつつもりだったが、時間があるから読書のチャンス、というのは、夏休みも終わりかけた頃にここに来た自分たちにはどうも当てはまっていないことに、言いながら気づいてしまった。

すると、聡介が、悠太が言い終わると同時に、

「ぼくも、普段は読みたくても読めないから、それで読みに来ました」

あちゃー、聡介、お前も適当なこと言ったな、と悠太は思った。

悠太も聡介も、読書感想文の宿題を済ませたい気持ちに嘘はないけれど、感想文が書ければいいわけであって、本を読みたいと思ったことはない。むしろ、本を読まずに感想文が書けないだろうかなんて無駄なことを考えているくらいだ。

「はははっ」

おじさんが笑う。

「まあ、本との付き合いは自由だよ。背表紙のタイトルだけ順に眺めるもよし、ぱらぱらめくって挿し絵だけ眺めるもよし、読んでみて気に入ったら二度も三度も読むがよし、だ」

なかなか粋なことを言う。このおじさんは、普通の大人とはちょっと違うことを言うような気がする。二人は感じていた。

虫干し作業

翌日はぴかぴかの晴天だった。

悠太と聡介にとっては、条件反射でサッカーボールを持って外に飛び出してしまうような天気だが、おじさんによると「虫干しびより」らしい。

悠太と聡介は虫干しのやり方を教わるようになった。

本につく虫を予防、撃退するために、本棚の掃除と、本に風を通す作業を行う。単純な作業だが、二人でやるにはなかなか時間のかかる仕事と思われた。

まず、本棚から本を取り出す。

棚のほこりを、ぞうきんできれいにふく。

部屋の床に掃除機をかける。

そして床に本を並べていく。本は、表紙が分厚くなっているものばかりなので、少し開いた状態にして、立てて置く。こうすることで、本に風が通るのだ。

「ようし、やるか」

聡介が腕まくりの仕草をする。

腕まくり？

「おい、半袖だろ」

悠太がつっこみを入れる。

聡介は、おどけた表情で、ありもしない袖を手首からひじのところまでまくる動作を続けていた。

「おーし、やるかー」

悠太も、それを見ていて、この際だから楽しんでやらなきゃな、という気持ちになる。

「よし、始めるかー」

まずは、本棚から全ての本を取り出していく作業。

ほとんどが小中学生向けの子ども本なので、「あ、これ知ってる」となりそうところだが、本を読まない二人にはそうもいかない。それでもたまたに見覚えのある本があることがあった。

本をその場で床に出してしまっただけでは床の掃除ができなくなってしまうので、棚から出した本はいったん廊下に積み上げてゆく。なかなか大変な作業だった。

それが終わると、棚と床の掃除だ。

固くしぼったぞうきんで棚をふいてゆく。本棚はそんなに高くなかったが、一番上の段はいすに乗らなければ届かない。

何度かぞうきんを洗い直してようやく全ての棚をふき終わり、床の掃除機も済ませた。

始めはおしゃべりをしたりふざけたりしながら作業していた二人も、繰り返しの単調さに、だんだんと無口になってしまった。

やっと掃除機をかけ終わって、きれいになった床に二人とも仰向けに寝転ぶ。

「うあー」

久々に声をそろえる。

まずは達成感、という感じだったが、まだ作業は半分も終わっていない。

「結構、大変だな」

「うん、まあ、大変だと思ってたけどな」

このまま寝転んでいたら、間違いなくそのまま明日の朝まで眠ってしまいそうだ。

「いかーん、このままでは寝てしまう」

悠太が勢いよく起き上がった。

「そうだよな。今日中にちゃんと終わらせないと」

聡介も上半身をむくっと起こした。

次はいよいよ、本を一冊ずつ立てて置く作業だ。

本は、いったん廊下に出して積み上げてあるので、そこから一冊ずつ取って、床に立てて置いていく。

最初のうちは等間隔でまっすぐ並べていたが、すぐに面倒になって、間隔も向きもばらばらになってしまう。

棚にぎっしりと整列していた本をこんなふうランダムに床に並べるのだから、とても部屋の床には置ききれない。二人は、本を廊下にも並べ始めた。

本にはいろんな絵やいろんなタイトルがあって、それを見ながら並べるのはなかなか飽きない。一冊の本をじっくり読むのは苦手だけれど、ぱらぱら見ながらどんどん並べていくのはちょっと楽しかった。

「なあなあ、これ見て」

悠太も聡介も自分が見つけた本を見せ合って、げらげら笑ったり、へえ、ちょっと見せてよ、なんて言ったりしながら、夢中で作業をする。

全ての本を立て終わったときは、思わず

「完了！」

と声をそろえ、ハイタッチしてしまった。

改めて自分たちが立てて並べた本たちを見回す。

なかなか、すごい眺めだ。

「本の海、ってかんじだなあ」

棚に行儀よく収まっているのではなく、床を自由に泳ぎ回っているかのような本は、気軽に手に取って読めるような気がした。

本をこの状態にしたまま昼ごはんを食べ、食後に本を棚に戻す予定だが、昼ごはんまではまだ時間がありそうだ。

絵本との出会い

悠太と聡介は、どちらかがそう提案するともなく、黙って本を読み始めた。

読む、というより、まさに本の海で泳いでいるような感覚だった。

床に寝ころびながら、目についた本を手に取り、ぱらぱらめくって、数ページ見たところで満足したらまた立てておく。

しかし二人とも、読書感想文の宿題のことはすっかり忘れていた。

寝ころぶ二人の体の周りを、本が取り囲んでいる。本を倒さないように体勢を変えるのには、結構気をつかう。

体の右側を下にして寝ころんでいた悠太は、周りの本にぶつからないように注意しながら、くねくねと体をよじて体の左側が下になるように寝返りをうった。

すると、そのときちょうど顔の前に立っている絵本のタイトルが目飛び込んできた。

『ゆうたくん』。

心臓が、どきっとした。

「ゆうた」はよくある名前だし、算数の問題なんかにも、「ゆうたさんは、えんぴつを六本……」なんていうのがよく登場して、みんなにからかわれるのは慣れっこだ。

だけど、突然目の前に現れた絵本のタイトルともなれば、やはり驚いてしまう。

悠太は絵本のページに手をかけた。

小さい子向けの絵本のような。表紙の絵は、主人公の「ゆうたくん」と思われる幼い男の子が、なんだか無表情で突っ立っている絵だった。足元に牛乳びんが置かれている。

牛乳びん……？

悠太は、ふと、押し入れで見つけた幼稚園の写真のことを思い出していた。

お話はこんな書き出しだった。「ゆうたくんは、ようちえんのさくらぐみで、とてもやさしい子です。いつもみんなとなかよくできます。でも、おへんじするのは小さなこえ。」

悠太は自分の幼稚園の頃を思い出していた。もう六年以上も前だ。自分自身の記憶というよりも、お母さんが何度も話す思い出話がそのまま思い出される。

おとなしくて引っ込み思案で、幼稚園の帰りの時間には、混んでいる下駄箱で他の子をどンドン譲ってしまって、いつもなかなか靴がはけなかった、というのは、帰りのお迎えに来てその一部始終を見守っていたお母さんやおばさんが今でもしょっちゅうおしゃべりのネタにすることだ。

今の悠太は、そんなことはなく、まあ、いつもみんなの先頭、とまではいかないけど、いつもなんとなくみんなの先頭の一つ後ろ、くらいにはいる。

小学校に入って少年サッカーを始めてからみるみる活発になった、とお母さんはよく言う。

絵本だから、ページごとにかわいらしい絵が入っていたけれど、悠太は絵などほとんど見ずに、ページをどンドンめくって一気に読んでしまった。

どきどきするような内容だったのだ。

初めは寝転がったまま、片手でページをめくっていたのだが、気づくと悠太は起き上がって、あぐらをかいて夢中になって読んでいた。

それはこんな内容のお話だった。

――ある、あたたかい春の日のことです。給食の時間、お当番の人が、みんなに牛乳とパンをくばりました。でも、ももぐみで、牛乳がひとつたりませんでした。

「せんせい、みかちゃんの牛乳がないよ」

「こまったね。せんせいの牛乳をのんで」

そのとき、なおきくんが大きい声でいきました。

「ゆうたくんが、ぬすんだんだよ」

みんながいっせいに、ええっ、とおどろきました。

「さっき、牛乳屋さんがもってきて、ようちえんの玄関に置いたとき、ゆうたくんがひとつぬすんでたよ」

せんせいは、ゆうたくんにきいてみました。

「牛乳をもっていったのはほんとなの？」

ゆうたくんは泣き出してしまいました。

「ほんとなの？」

ゆうたくんは、泣きながら、うん、といいました。

「それから牛乳、どうしたの？」

と、せんせいがききました。

「のんだの」

とゆうたくんがいうと、ゆうたくんはしかられました。いけないことをしたからです。

ゆうたくんは、あとで、もう一度せんせいとお話をしました。せんせいが、

「ゆうたくん、ほんとうは、こいぬに牛乳をあげていたんでしょう」

といったので、ゆうたくんはとてもびっくりしました。

「どうして知ってるの？」

「うらの竹やぶのところに、こいぬがいるよね。ゆうたくん、おあそびの時間によく見に行っていたでしょう」

ゆうたくんは、うん、といいました。

「ゆうたくんが、やさしい気持ちでしたのは、せんせいもとってもよく分かるけれど、こいぬにはエサをあげちゃだめっておやくそくだったよね。それに、牛乳をないしょでもっていくのは、いけないことだよ。お友達やせんせいをこまらせてしまうよね」

はい、ごめんなさい、とゆうたくんはいいました。――

そして、絵本はこう締めくくられていた。「ゆうたくん、まわりの人や、動物に、やさしくするのはとてもむずかしいことだね。でも、たいせつなのは、やさしいきもちだよ。やさしいきもちがあれば、きっといつかつたわりますよ。」

悠太は、すっかり思い出していた。夢を見ているのかと思うほどに不思議で、どきどきが止まらなかった。

「これ……これ、僕のことだ！」

そう、これは悠太のことだ。ただ、ただ一つ、重要な部分が違ってはいるが――。

でもどうして？

悠太ははっとして、絵本の作者名を見た。原田俊恵。知らない人だ。

知らない人？

「は、ら、だ、としえ」

声に出してみても、ようやく分かった。

「原田先生！原田先生だ！」

悠太は心の中で叫んだ。胸がぎゅうっと痛くなる感じがした。

原田先生との思い出

ふと聡介の方を見ると、こちらに背を向けていて顔が見えないが、どうやら眠っているようだ。

聡介が寝返りをうった。よだれをたらして眠っている。

原田先生は、悠太が牛乳を黙って持ち出したときも、優しい言葉をかけてくれることを忘れなかった。

ほかの先生に叱られて真っ赤な目をしていた悠太に、この絵本と同じようなことを言ってくれた先生だ。

悠太はこの先生が本当に大好きだった。いつも先生を見ていた。先生の笑顔をはっきりと思い出すことができる。

そして、先生もまた悠太のことを見ていてくれたのかもしれない。

悠太が、原田先生とのことで思い出せることは本当にたくさんあった。

悠太は次々とわき出すかのようにたくさんのことを思い出していた。今になってみると、なんだか恥ずかしい。

悠太が、お気に入りのハンカチをなくして泣いていたときは、どこからか見つけてきて、はい、あったよ、と言って渡してくれた。そのときは先生が魔法使いなんじゃないかと思ったものだ。

それから、工作の時間にみんなで画用紙のロケットを作ったときのこと。園庭に出て、遊具に登って、一斉に自分の作ったロケットを飛ばすことになった。友達や先生が声をそろえて

「十、九、八、七……」

とカウントダウンを始めたのだけれど、悠太はその言い方を知らなかった。原田先生は悠太の横に来て、かわりに言ってくれたのだった。

あの日……悠太が幼稚園で牛乳を盗んだ日、悠太を叱った別の先生は、ひたすらにこう言った。

「泣いてたんじゃ分からないよ」

悠太はこの言葉が大嫌いだ。

ただ泣いているだけなのに、分からないって言わないでほしい。泣き終わるまで、ちょっと待っていてくれたって、いいじゃないか。

幼稚園の頃、泣き虫だった悠太は、大人からこの言葉をかけられるたびに、嫌な感情でいっぱいだった。

泣きながら話すと声が変わる。そしたら「聞こえないよ」って言われる、怖い……。

だから悠太は、大人になっても、子どもに対してこの言葉だけは言うまいと決めていた。

子どもは、決して分かってほしくて泣いているのではないって、大人になってもずっと覚えていようと思っっているのだ。

あの日……

「悠太くん、ほんとうは、子犬に牛乳をあげていたんでしょう」

原田先生にそう言われた悠太は、すごく小さくうなずいた。

絵本では、「どうして知ってるの？」なんてセリフがついているけど。

僕はそんなこと言ってない。うなずいただけだ。

悠太はその部分を見過ごすわけにいかなかった――。

おじさんのいない日

今日はおじさんの「仕入れ」の日。

悠太と聡介の完全に自由な一日だった。

朝起きると、もうおじさんはいなかった。朝から街の大型書店を回って、気に入った本を買ってくるのだという。

「やっぱりまずは」

「海に行ってみたいよなあ」

悠太は、大きなスポーツバッグにぽんと入れて持ってきていたサッカーボールを取り出して脇に抱えた。

「よし！」

「海でサッカー！」

おととい電車を降りた駅まで戻って、そこから反対側の坂を下って少し歩くと砂浜がある。

「簡単な道だから。すぐわかるよ」

そう言って、おじさんが昨日のうちに地図を書いてくれていた。いらぬ紙の裏側に書かれたそれは「家」「駅」「坂」と、通過点だけが書かれていて、目印も何もない適当な地図だった。おじさんらしい。

今日も快晴。セミがうるさいくらい鳴いて、気持ちを盛り上げる。汗がふき出る。

太陽はぎらぎら照りつけているけれど、木の陰になっているところは風が吹くとほんのり涼しくて、汗が乾く感じがした。

「この地図、かなり適当だけど、なんかフィーリングで伝わってくるな」

おじさんが書いてくれた地図を持っている聡介が、地図をぐるぐる回しながら言う。

砂浜に着いた。

もう八月も終わりなので、真夏の海のにぎわいはない。いくつかパラソルが見える。

「海だー」

悠太は叫んで、抱えていたボールを大きくけり上げた。ポーンと飛んだボールを見上げると、真っ白に輝く太陽が目に入った。思わず顔をしかめる。

ボールを追って二人が駆けると、乾いた砂が舞い上がる。

空も海も広くて、大声をあげてとにかくはしゃいだ。

波打ち際でボールをける。波が泡のようになって空中を舞う。砂に足をとられて何度も転ぶ。転ぶことが楽しくて、わざと転ぶ。

笑うのと、走り回るので、二人は息が切れてきた。でも、これが本当に気持ちいい。楽しくて、息が切れて。この瞬間は本当に気持ちがいい。

「うー、タイム！」

これ以上走れなくなって、悠太がそのまま砂浜に寝転んだ。

聡介はボールを追ってふらふらになりながら走り続けている。

そんな聡介を見送って、悠太は、砂まみれで空を仰いだ。

昨日の絵本のことが頭から離れない。この空とは裏腹に、悠太の心の中にはもやもやと小さな雲が浮かんでいるようだった。

家に戻ると、砂で洗ったかのようにってしまった服を着替え、シャワーを浴びた。

「やー、腹減ったなあ」

そろそろ昼ごはんの時間だ。そういえば、今日は朝食もとらずに遊びに出してしまったのだ。

台所に行くと、おじさんが残したメモがあった。

「米と野菜です。すまんがとりあえずこれでなんとかしてくれ」と書かれている。

食卓に、ボールにお米が入っているのと、生野菜が無造作に置かれている。トマト、きゅうり、レタス。昨日とおととい食べたカレーのごはんはきれいになくなって、鍋は洗われている。

「鍋でごはんって炊いたことある？」

聡介が悠太に聞く。

「ごはん炊くって言ったら、米といで、炊飯器でピッだなあ」

それすら、お母さんの手伝いで一カ月に一度、やるかやらないかだ。

「だよなあ」

「家庭科の授業でやらなかったっけ、なんか透明の鍋でごはん炊いてさ、観察しながら、米は、こうやってごはんになるんです、みたいなさ」

「やったやった」

「米はどうやってごはんになるんですか」

「そりゃまあ、まず米が水を吸って、だなあ」

「覚えてる？やり方」

「ばっちり覚えてる！わけないだろー」

聡介は、悠太といるときにはいつもこんなふうにあざむきすることを忘れない。

「そうだ、本だ！」

あざむいていた聡介が突然真顔になる。

「え？」

「虫干ししてたときさ、おれ、おなかすいちゃって、食べ物系の本を探して見てただけどさ」

こいつ、それでよだれをたらして寝てたのか、と悠太は思う。

「なべでごはんを炊くっていうの、載ってた気がする」

階段を上がり、本の部屋に入る。昨日苦労して掃除と虫干しをしたこの部屋に、二人とも愛着がわいていた。

「ここ、ここ」

聡介がたくさんある本の中からまさきに目当ての本を取り出したのには悠太も驚いた。どうやら、食べ物系の本をまとめて棚に戻して、その場所を覚えていたらしい。

「この本の……ほら、ここ」

ページをめくってすぐのところに、鍋でごはんを炊く方法が写真つきで載っていた。

「やってみるか」

台所に戻った二人は、さっそく米をとぐことにとりかかった。

ボールに入った米をそのまま水道の水でとぐ。一度だけ家庭科の授業でやったことがあったので、なんとなくできるのだけど、米がだいぶこぼれてしまった。

これをしばらく水につけておくらしい。

「野菜はどうするか」

「そのまま食べよう」

トマト、きゅうり、レタスなら、そのまま食べればいい。洗って、切りもせずそのまま皿にのせる。本の説明を見ながらなんとか炊き上げたごはんは、水の量が多かったらしく、べちゃっとなっていた。それでも、ごはんの湯気の香りに変わりはない。

「いただきます！」

おじさんが米や野菜の隣に用意してくれていた茶碗に山盛りに盛ったごはんは、つやつやして見えた。たまにおこげができています。

二人は無言で、夢中で食べた。

「ふうー、白いごはんと野菜サラダだけだけど、うまかったなあ」

「野菜サラダというより、まるごと生野菜って感じだったけどな。うまかったあ！」

ごはんを炊くのに時間がかかってしまって、気づけばもうすっかり夕方だ。

おじさんも、もうすぐ帰ってくるのではないだろうか。

使った食器を洗ってきちんと片づけると、満腹感と合わさって、味わったことのない満足感があった。

二人は庭に出た。

庭にはおじさん手作りの花だんがある。おととい初めてこの家に入ったときに見えたけれど、ちゃんと見たのはこれが初めてだ。

ごつごつしたいろいろな大きさの石が囲む花だんには、ひまわりや、朝顔など、夏の花がちょっとずつ植えられていた。そこまでていねいな手入れはしていないようで、雑草もわんさか生えている。

二人は、花だんの周りの石の中でも特に大きい石を選んで、腰をおろした。ちょうど家の陰になっていたその石はひんやりとしている。

「あー。砂浜でサッカーして、苦労してごはん炊いて、ごはん食って、一日が終わったな」

悠太が大きいのびをしながら、爽快な表情で言った。

「うん、内容は少ないけど、なんか盛りだくさんていうか、充実した一日だった気がする」

悠太と聡介は、満ち足りた気持ちで、ぼんやりと今日一日のできごとを思い出していた。

空はほんのり赤くて、ひぐらしがキキキと高い声で鳴いている。元気なミンミンゼミの声も、混じって聞こえてくる。

暑さの落ち着いた湿った空気が、暮れかかった夏のおいを運んでくる。

本当のこと

悠太はまた、昨日見つけた絵本のことを思い出していた。

「なんだよ、そのため息は一」

浮かない顔をしている悠太に気づいた聡介が、口調はふざけているけど、なんとなく真顔で聞いてきた。

悠太は、気になっている絵本のことを聡介に話そうか迷っていた。

「なんだよーなんでも言えよ」

聡介は、悠太には何か気がかりなことがあるのだと完全に見抜いている。

「昨日、本の部屋でさ」

悠太は、偶然見つけた絵本『ゆうたくん』に書かれていたストーリー、それが自分の幼稚園の頃のことであることを、聡介に話した。

絵本に書かれていたことは、間違いなく自分のことなのだけれど、実際はちょっと違うんだ。そう……。

本当は……本当は、牛乳を子犬にあげたりなんかしていない。水たまりに牛乳を入れてみたかっただけだったんだ。

前日の大雨で園庭にできていた大きな水たまりに、牛乳を入れてみたら、どうなるのか。牛乳が、雲みたいに浮かぶのか。溶けて、全部透明になってしまうのか。

どうしてもやってみたくなくなった。

牛乳屋さんがいつものように幼稚園の玄関に牛乳を置いていったのをたまたま見ている、ふと思いついた。こういうのを、「できごころ」って、言うんじゃないだろうか。

ちょうどそのとき、周りに誰もいなかったのだ。だからできごころをすぐ行動に移してしまった。牛乳の入ったびんを一つ取って、園庭に行き、落ちていた枝でふたをむりやり開けて、水たまりに牛乳を流しこんだ……。

これは今でも誰にも秘密だった。友だちに言ったら、告げ口好きの友だちが先生に言いつけてしまうし、幼稚園ではいつも食べ物を大切にすることを教わっていた。

そして悠太がいちばんこのことを秘密にしたかった相手は、原田先生だった。

悠太は原田先生にこのことを秘密にしたいくて、嘘をついたのだ。子犬にあげたことにしておいた方が、まだましだ、そう思ったのだ。

だから原田先生の勘違いに便乗して、嘘をついた。

「子犬にあげていたんでしょ」と聞かれて、うなずいた。

そして原田先生は悠太のことを信じて、そのことを絵本に書いた。

聡介は、悠太がまじめな顔で話しているのだから、気をつかって、だまって悠太の話を聞いていた。

ところが悠太の話が終わるやいなや、

「すげえ！」

と大きな声で言う。

「え」

「すげえな、悠太、本になったってことでしょ」

「いや、本になったっていうか」

「ある意味、有名人じゃんか」

「え、別にそういうことにはならないと思うけど」

聡介の反応は、悠太にとって、拍子抜けだった。

聡介がどんな反応をするか、特に予想していたわけではないけれど、なんていうか、とにかく予想外だった。

悠太は絵本を偶然見つけてから、幼稚園のできごとを思い出し、自分がついてしまった嘘のことで考えこんで、大好きな原田先生への罪悪感にもやもやしていたのに、聡介はそのもやもやを吹き飛ばす勢いで「すげえ！」

の一言だ。

「なんか、嘘ついたってこと、思い出したらもやもやしちゃてさあ。絵本読むまでは忘れてたわけだし、いまさら、なんだけど、とにかくもやもやするんだよね……幼稚園の、その、原田先生っていう先生のこと、だましたみたいでさ」

聡介は小学校に入ってから友達で、違う幼稚園の出身だ。原田先生のこと知らない。

「うーん、でもさあ、そんなちっちゃい嘘、誰でもつくだろ。幼稚園児の嘘なんてさあ。おれも、よく、トイレ汚したの自分じゃないよって、嘘ついてた」

聡介はひょうきんに笑った。

「それに、そういうのって、好奇心、っていうんじゃないの」

「え」

「だから、牛乳を水たまりに入れたらどうなるかとかって。なんか最近山野先生がよく言ってるだろ、好奇心を大切にしよう、って」

聡介は山野先生の口調をまねしながら言った。

山野先生というのは、悠太と聡介の今の担任の先生だ。

歴史に残るような大発明をした人も、小さな好奇心が大きな発明につながったりしたんだ、なんて話をして、机の上の勉強だけじゃなく、遊びの中にも大切なことがいっぱいある、というような話を、最近よくするのだ。

聡介が仕切り直すように大きく息を吸い、言う。

「好奇心と、幼稚園児のちっちゃな嘘と、全部、普通のことだよ」

ふわっと風が吹いた。

二人が腰かけている花だんの石は、さっきからすっかり家の影になっているので、少しおしりをずらすとまたひんやりした。

朝顔のつぼみが、明日の朝を待っているように見えた。

悠太は気持ちが軽くなって、やっぱり聡介に話してよかったと思った。

そっか、そうだよな。幼稚園児のしたことだ、しかたないよな。

最後の夜

「ところで、読書感想文は、書けたのか」

「仕入れ」から帰ったおじさんは、またしてもカレーを作った。カレーは、水とカレールーがあれば簡単に作れて、野菜も肉も何でもたっぷり入れて食べられるから最高の食べ物、なんだそうだ。

さっきはごはんと生野菜だけだったので、カレーはすごくありがたくておいしかったけど、おじさんが夏の間毎日カレーを食べているのかと想像すると、それはさすがに飽きそうだ。

おじさんの口から出た「読書感想文」という響きに、悠太と聡介は

「うわっ」

と声をそろえてしまった。

「すっかり忘れてた！」

「なんだ、今日のはっきり読書感想文のための本を探して読んでるのかと思ってたよ」

本を探すどころか、砂浜でサッカーして、苦労してごはんを炊いて、ごはんを食べて、一日が終わってしまったのだ。

「読む時間もないだろうし、選んで持って帰りなさい。どれでも。貸してやるから」

おじさんが言う。

そうか、もう明日は家に帰るのだ。

三日連続のカレーを食べ終えて本の部屋に上がる。この部屋とも、もうお別れなのだ。

「いやー、どの本にするかな」

外はすっかり真っ暗になり、ガラスの窓に自分たちの顔が映っている。

「なんか適当に三冊くらい借りてって、帰りの電車で考えるか」

聡介は、すでに二冊を手にとっていた。

「そうだよな。いまさら、じっくり選んだって仕方ないし」

悠太も、なんとなく新しそうな表紙の本を選んで手に取った。

すると、一冊の本が目にとまった。

『本の夢を見る方法』。

本を枕にして寝るとその本の夢が見られる。どうやら、それぞれの話の主人公が、自分の大好きな本を枕にして夢を見るという、短いお話がたくさん載っている本らしかった。

悠太は思った。

今晚、あの絵本を枕にして寝てみよう。

悠太も聡介もとりあえずそれぞれ三冊の本を選ぶと、隣の部屋に移動した。この部屋で寝るのも今日が最後だ。

聡介は借りた三冊の本を自分のカバンにしまいこむ。

悠太はその三冊の中に、こっそり『ゆうたくん』の絵本を持っていた。なんとなく聡介には気づかれないようにしていた。

聡介がパジャマに着替えていてこちらを見ていないすきに、二冊をカバンに入れると、絵本をまくらの下に差し込んだ。

「あーあ、もっといたいよな」

二人は電気を消してふとんに横になると、暗い天井を見つめた。

「うん、でも夏休み終わっちゃうなあ」

「もっと早くここに来たかったな」

「毎日カレーだけだな」

「でもおじさんのカレーは最高だ」

二人は、この家との別れ、夏休みの終わり、夏の終わりを惜しんだ。もうすぐ二学期が始まる。

遠い夢

悠太は枕の下の本が気になって、なかなか寝つけなかった。

そして目をつぶったまま、幼稚園の頃のことを思い出していた。

いろんな出来事が、断片的によみがえってくる。時間を守らずに叱られたこと、先生のピアノの音、帰りの時間に歌う歌……。

つばめ幼稚園では、給食のあと、自由遊びの時間になる。

園児たちは、ここらへんの幼稚園の中ではかなり広い園庭で、甲高い声を上げて走りまわっている。じゃんけんをする声、けんかをする声、歌を歌う声などが混じり合う。

幼稚園の職員室に、数名の先生がいる。ほとんどの先生は、園児たちと一緒に園庭に出て、園児たちに危険がないか見守りながら、一緒に遊んでいる。

職員室に原田俊恵先生がいた。悠太の大好きだった、原田先生だ。原田先生は難しい顔をして、何を見るでもなく一点を見つめている。

昼の自由遊びの時間が終わり、先生から声がかかると、子どもたちは自分の教室に戻る。クラスの「午後遊び」の時間だ。

原田先生は何か決心したような表情で、自分の受け持つぞうぐみの教室に入って行く。手には、牛乳の空きびんの入ったラックを持っていた。びんがカチャカチャ音を立てる。

いつも給食のあと、子どもたちは自分が飲んだ牛乳の空きびんを水ですすいで、このラックに返す。夕方に牛乳屋さんが回収にくるのだ。

先ほど自分たちがいつものようにすすいで返した牛乳びんを持って先生が教室に入ってきたので、自分たちのおしゃべりに夢中になっていた子どもたちの視線が先生に集まった。

「先生、どうして牛乳びん持ってるの？」

子どもたちが口々にたずねる。子どもたちの中には悠太もいた。

「今日のお遊びは、この牛乳びんを使ってしましょう」

原田先生は、顔をいつもの笑顔に変えて子どもたちに告げる。

「えー、何するの」

「先生、何するの」

「何するのー、給食ごっこ？」

きゃはは、きゃはは、と無邪気に笑いながら、子どもたちが先生の周りに集まってきた。

「今日はこのびんに、きれいな色水を作って、入れましょう」

子どもたちの目が一瞬で輝いた。

おしろい花や、あじさいの葉を使った色水遊びは、子どもたちも大好きだった。ビニール袋に花や葉と水を入れて、軽くたたくと、鮮やかな色水ができあがる。絵の具を使えば、黄色や水色の色水も作れる。

子どもたちは夢中になって、思い思いの方法で色水をつくり、牛乳びんに入れていく。

色水を作るために花や葉を集めようと、子どもたちが園庭に出ていた。

悠太はそれに混じって、こっそり水たまりの方へ駆けて行く。

水たまりに牛乳を流しこんでしまった悠太は、どうしよう、と焦って、牛乳びんに水たまりの水を入れてしげみに隠しておいたのだ。うす茶色の、コーヒー牛乳のような色。悠太はこのびんをそのまま教室に持って行く。

「さあ、みんな、きれいな牛乳びんになったかしら」

再び教室に集まった子どもたちに原田先生が呼びかけると、子どもたちは一斉に、自分たちの作った色水をかか

「先生、見て」

と口々に言う。

「まあ、きれいにできました。みんな一人一人違う色で、すてきね」

原田先生は子どもたちに、牛乳びんを一行に並べるように言う。教室の床に、カラフルな牛乳びんが並んだ。

「さあ、みんなも並んで」

原田先生は、牛乳びんと、そのうしろに並んだ子どもたちの集合写真を撮ることにしたのだ。

「撮るよー、はい、チーズ」

子どもたちがすっかり帰ったあと、原田先生が職員室で泣いていた。

「原田さん、大丈夫」

園長の中野先生が原田先生の肩に手をおき、声をかける。

園長はおばあちゃん先生で、とても穏やかだけど時には厳しい先生だ。子どもたちからは、ちょっと怖い先生と思われていたけれど、みんな大好きで、この先生の言うことをよく聞いた。幼稚園の先生としてはかなりのベテランなので、若い先生たちからはいろいろな相談を受けることも多い。

原田先生は、まだ幼稚園の先生になってから二年目だった。子どもたちのことが本当にかわいくて、そんな子どもたちと過ごす毎日が楽しくて充実していた。そんな原田先生が、今日は目に涙を浮かべ、落ち込んだ表情でぼんやりしていたのだ。

「悠太くんがどうしたら正直に謝って牛乳びんを返してくれるのか、考えたんですけど……私、間違っ

たことをしてしまったんでしょうか。自分から謝るチャンスを作ろうと考えたんです」

原田先生は涙目ながら、声をかけてくれた園長の方をしっかりと見て、問いかけた。

「原田さん、あなたのしたことが間違っていたかどうかは、誰にも決められない。子どもと向き合う方法に、答えなんてないのよ。あなたが真剣に考えてしたことだったら、子どもたちにちゃんと伝えるはずで

す。悠太くんはおとなしい子だけど、そのぶん頭の中でいろんなこと、考えてる子よ」

おみやげ

窓からの明るい日差しで目が覚めた。

悠太は、今、自分がどこにいるのか一瞬わからずにいた。

今のが、夢だったのか。

幼稚園の頃の事を思い出しているうちに、うとうとと眠りに入り、夢を見たらしかった。自分の全く知らなかった原田先生の姿を見たのだ。ただの夢なのだけれど、ただの夢とは思えなかった。

ついに家に帰る日だ。

悠太と聡介とおじさんは、いつものように、食卓に向かい合って座っていた。

おじさんは、昨日、紙袋いっぱいを買ってきた本の中から、悠太と聡介に一冊ずつ手渡した。

「さ、おみやげだ。持って帰りなさい」

悠太が受け取った本の表紙には、何も書かれていない。

悠太は聡介がもらった本に目をやった。全く同じ物だ。白い表紙は、ただ白いだけで、文字も絵も見当たらない。

本を開いてみた。すると……

「真っ白だあ」

聡介が声をあげた。悠太も本を開いてみる。

確かに、ページも真っ白だ。ノートのような線すら入っていない。

「おじさん、これは……」

「おえかき帳、ですか？」

悠太も聡介も、めくってもめくっても白いままの本を何度もめくって見ていた。

「君たちが、書いていくんだよ」

「え？ぼくたちが？」

悠太と聡介は顔を見合わせる。

「おじさんはよく本屋に行くんだが、実にいろんな本がある。中には、悩んだときに読む本、とか、人生に迷ったときに読む本、とか、そんな本も本屋にたくさん並んでるんだ。悩んでる人や迷ってる人は、つい、手にとりたくなるだろうな。おじさんも、学生の頃なんとなく暗い気持ちになっていたときに、ぱらぱらとめくってみたんだ。でも、なんか違うって思ったんだ。どの本を読んでも、納得して勇気がわいたりとか、元気が出たぞ、ってことはなかった」

なんだか後ろ向きな話のようなのに、おじさんの表情は明るい。

「それで？」

初めてこの家に来たときには少し硬かった聡介も、自然とおじさんと話をしている。悠太も、聡介の「それで？」にそろえて、おじさんの顔を見つめる。

「納得はしなかったけど、勇気がわいたんだ」

おじさんが力強く言う。

「え？」

「どういうこと？」

おじさんは続ける。

「たとえば、本に、あきらめが肝心、なんてことが書いてあったとする。それで納得する人もいるかもしれないが、おじさんは違った。そのとき、やっぱりあきらめたくないっていう気持ちが逆に強くなったん

だよ」

悠太と聡介は無言のままおじさんの話を待った。

「物語やマンガだって同じことだと思うよ。本を読んで、感動したり納得したりできたなら、それでいい。でも、感動しなかったり、納得できずに反発したくなったりした場合でも、それでいいんだ。それも大事なんだよ。本だけじゃない。友達とけんかしたとき、親や先生に叱られたとき。誕生日にプレゼントをもらったとき。うれしいことも嫌なことも納得できることもできないことも、いろいろある。でも、そこから自分が何を感じたかっていうのを、しっかり言葉にして書いておくんだ。それが、その自分自身の言葉が、一番自分の力になるんだ」

悠太と聡介はおじさんの話がわかったようなわからないような、とにかくおじさんが一気にしゃべったので、なんだか圧倒されていた。

「おじさんも、白い本を持っているんだ」

ちょっと待ってろよ、と言っておじさんは自分の部屋から五冊の本を持ってきた。全部、同じ「白い本」だ。

ちょっと古そうなその白い本の最初のページを開いて、おじさんは見せてくれた。

そこにはサインペンでこう書かれていた。

「あきらめが肝心、と書かれた本を読んで、絶対あきらめたくないと思った」

おじさんが大学生の頃に書いた物らしい。

「この日から、ずっと白い本に書くことを続けてるんだ。ここには、自分の結論だけを書いてる。人に言われたこととか、本を読んだら書いてあったこととかを書き写すのではなくて、自分が感じたことを自分で言葉にしたもの、自分の結論が一番、自分にとって説得力がある。そして自分の力になってくれるんだ。実際、くよくよしたとき、おじさんはいまだにこのノートのこのページを開く。自分の字で、あきらめたくない、って書いてあると、すごく励まされる」

「それがあ意味、おじさんの読書感想文なんだね」

悠太が言う。

「なかなかいいまとめ方だ。学校に提出する読書感想文とは、ちょっと違うかもしれんがな」

悠太も聡介も、改めて、手元の白い本に目をやった。

「確かに、その一行だけじゃ、読書感想文として提出はできないね」

三人はそろってげらげら笑った。

おじさんが駅まで見送ってくれた。

「また来年の夏も来るか」

「うん、来たい」

悠太と聡介が声をそろえる。

「じゃ、待ってるからな。カレー作って」

夏が終わる

帰りの電車は、悠太と聡介以外にほとんど誰も乗っていなかった。たまに乗ってきた人も、三駅くらいで降りて行く。

帰ったらすぐに新学期。読書感想文を終わらせなければならない。二人は借りてきた本をぱらぱらとめくっていた。

悠太の頭の中を、いろんなことが駆け巡った。それは『ゆうたくん』の絵本を読んで、自分が感じた、たくさんのことだ。

絵本を読むまで牛乳びんのできごとをすっかり忘れていた悠太だったが、思い出したときには原田先生に対する申し訳ない気持ちでいっぱいになった。

それから、聡介に話してみたら、いまさら思いつめることでもない、と思いつつ直すことになった。

ところが夢を見たことで、自分の嘘が大好きな原田先生を苦しめ、悩ませてしまっていたということ、原田先生が悠太のために精一杯考えて、行動を起こしてくれたということを知った。

原田先生が泣いていたことも。

幼稚園のときには決して見ることのなかった、大好きな原田先生のもう一つの姿を知った悠太は、おじさんのくれた白い本の最初のページにこう書いた。

「原田先生、ありがとう」

この「ありがとう」こそ、おじさんが言っていた、悠太の中の「自分の結論」なのだ。

本をめくっていた悠太が、ぱたんと勢いよく本を閉じる。聡介が悠太の方を見た。

「あのさ、もう無理だよ、本読むの。時間ないしさ」

悠太は聡介に向かって真顔でそんなことを言っていた。

「は？じゃあ、どうするの」

「考えたんだけど、今回の、おじさんの家でのことを全部書いたらどうかな。本を虫干したこととか、いろんな本に出会ったこととか、本見ながらごはん炊いたこととか……おじさんからもらった白い本のことさ」

聡介はちょっと考えてから、うなずく。

「うーん、まあ、そっか、ある意味、読書感想文ってことになるのかな」

「読書体験記ってとこかな」

「お前はほんとうまいこと言うよなあ」

聡介は、悠太の発言に感心することが多い。

「新しいだろ、読書体験記」

「それでいくか」

夏休みが終わっても夏がぱたりと終わるわけではなく、少しずつ秋になっていくのだけれど、気持ちの中の夏は夏休みの終わりと共に終わってしまう。

小学校生活最後の夏が終わる。

二人の乗った電車は、一駅ごとに夏を惜しみながら、秋へと向かっていくかのようだ。

夏の本棚

<http://p.booklog.jp/book/74360>

著者：ゆかわ まこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lisshunn/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/74360>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/74360>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ